

教育・研究活動報告

生涯学習センターの活動[†]

船橋 昭一*

(2008年09月09日受理)

Review of the Lifelong Learning Center

Shoichi Funabashi

(Received September 09, 2008)

The Lifelong Learning Center of the Nippon Institute of Technology has been established since 1995. We will introduce briefly the activity review of this center in this report. Our mainly subjects are NIT Open College, i.e., the cultural citizen chairs, the academic chairs for the advanced teacher's license authorized by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and the public chairs for the senior generation under the agreement with local government. The total students of those chairs are about 1000 people every year.

1 はじめに

生涯学習センターの設立は平成7年4月1日である。大学を社会に広く開放、種々の文化教育活動を通じ社会の発展に寄与することを目的としている。一般に大学が運営する生涯学習は、教養講座、資格取得講座が主流で、各大学とも学内の研究施設と人材の活用をする方法をとっている。本学の場合、現在の主要事業は通年開講の教養講座「NITオープンカレッジ」、教育職員専修免許取得のための「日本工業大学免許法認定公開講座」、埼玉県との協定による学部授業の開放講座「リカレント教育：シニアチャレンジ講座」である。これら各種講座への受講生数は、通年のべ人数でおおよそ1000名である。「NITオープンカレッジ」受講生の大部分は50代以降のシニア世代で、大学周辺の市町より通学している。この講座が果たす地域文化への貢献度は高いと自負してよいであろう。また、近年こそ受講数が少なくなっているが、免許法認定公開講座は平成7年度実施以来のべ2305名が受講した。この講座を担当した大学院各専攻教育職員の果たした役割はきわめて大きい。本年度より新たに開設した「シニアチャレンジ講座」では、春学期の学部授業3科目を開設したところ、24名が応募、受講生の評判は上々であった。この講座は埼玉県と本学の協定による県内8大学共同実施のものである。なお、不定期であるが、サーバー製作や陶芸文化講座といった公開講座、音楽会などを開設してきた。平成19年6月9日、開学100周年を記念して市民300人を招待する「ハーブと室内楽の夕べ」は大好評であった。

2 NITオープンカレッジ

2.1 市民のための公開講座

表記の講座名により広く市民に開放している。講座は、陶芸、水彩画、油絵からなる作品制作講座と英会話、中国語会話からなる語学講座である。各講座とも通年の開講である。10回の授業を1期として年間3期を設定している。指導は大学非常勤講師、学外から招聘の講師に委嘱している。授業時間は陶芸、絵画講座は120分、語学講座は90分である。各講座とも定員を設け、応募者が多数の場合は抽選により決定する。平成20年度第1期は受講生総数332名で事業を開始した。講座在籍数は例年ほぼこれと同じである。開設講座および担当講師一覧を表1に示す。

表1 平成20年度開設講座20年度・第1期在籍数一覧

教室名	講座名	講師	定員	在籍数
絵画教室 (7講座)	水彩画スケッチ	江刺家 隆	17	21
	水彩画一般1~3	〃	各17	53
	油絵初級	〃	17	18
	油絵一般1~2	江刺家 隆	各17	34
陶芸教室 (5講座)	陶器をつくろう入門	野口 健一	16	7
	陶器をつくろう1	手塚 清	16	15
	陶器をつくろう2	川上 伸生	16	13
	陶器をつくろう3~4	渡辺 克典	各16	26
英会話教室 (8講座)	英会話初級1	レンジー・クロスビー	12	14
	英会話初級2~3	カホル・P・ケア	12	25
	英会話中級1	レンジー・クロスビー	12	15
	英会話中級2	カホル・P・ケア	12	14
	英会話上級	カホル・P・ケア	12	15
	英会話基礎1~2	志村 恵子	12	26
中国語会話 教室(3講座)	中国語会話初級1~2	張 文郁	12	23
	中国語会話中級	張 文郁	12	13

*所属 生涯学習センター長

2.2 授業風景

絵画教室：この教室はW1棟2Fに2部屋の専用教室(372m²)を利用、指導の場としている。講師は本学非常勤講師でもある洋画家に委嘱している。絵画教室は、水彩画、油絵の2つの部門を通年開設、夏の絵画特別教室(平成20年度は30名参加)も恒例になっている。作品自主制作のための教室開放の便もはかっている。受講生のうちには埼玉県美術展、国立新美術館公募団体展(日本水彩展、創元展)の出展者もいる。図1は油絵指導風景である。



図1 油絵指導風景

陶芸教室：陶芸教室もセラミック棟に専用教室(195m²)を設け、16基のロクロのほか、本焼き専用の30kw, 20kwの電気炉3台、15kwの素焼き専用炉を常備している。陶芸の教室としてはきわめて恵まれた教室環境にある。講師は自身で工房を主宰する陶芸家を含め4人に委嘱している。各教室とも16人規模で通年開設をする。夏の特別講座もほぼ例年開講(平成20年度は57名参加)している。陶芸作品を含む書の個展を開いた受講生もいる。図2は陶芸制作指導風景である。



図2 陶芸制作指導風景

英会話教室：語学教室は本館普通教室を利用、12~15人規模で指導を実施している。英会話上級クラスには10年のキャリアを持つ受講生も珍しくない。教室の雰囲気の

よさと高い学習意欲が長い間レッスンに励む原動力と考えられる。講師はBritish English, American Englishをあやつる2人のnative speaker講師と本学非常勤講師である。英会話教室は平成20年度より2つ初級クラスを増設して充実を図った。図3は英会話指導風景である。ダイアイト形式、フリートーキングで話題が弾む。



図3 英会話指導風景

中国語会話教室：この教室は、平成18年度開設の新しい講座である。担当は生粋の北京語を話す日本在住中国人講師である。受講生は初級より指導を受けた中級クラスのほぼ全員が3年目の学習に入っている。会話は北京語の学習である。受講生と留学生別科生との交流もあり、よい雰囲気講座が続く。図4は中国語会話指導風景である。



図4 中国語会話指導風景

2.3 受講世代は50代以降・近隣の市民が通学

受講生の意識調査は未調査である。ここでは、受講者の年齢、継続性、通学区域などを紹介する。受講生募集は大学ホームページ、市町発行の公報、新聞折込広告を利用しての広報活動であるが、予算の関係から十分とはいえない。まず、受講生在籍統計を見る。先に触れたように、大部分の受講生は50代以降の世代が中心である。次ページ表2は受講者の世代分布を平成20年度第1期受講生で見たものである。女性の受講生が全体の71%、男性受講生が29%である。これは例年の傾向と一致する。平均年齢は64歳、最年少は本学学生で20歳(水彩画教室在籍)、最高齢は陶

芸教室在籍の91歳の男性である。陶芸、絵画などの制作部門では60代前半の受講生が受講しているのに比べ、会話部門では50代後半の受講生が多数を占め、女性が多いことがうかがえる。

表2 平成20年度受講生年齢分布

項目	陶芸	水彩		油絵
受講者数	60名	74名	65名	52名
女性	46	77%	48	65%
男性	14	23%	26	35%
平均年齢	63歳	65歳	65歳	66歳
最年少	40	20	20	44
最高齢	91	85	85	82

項目	英会話	中国語会話	計
受講者数	109名	36名	331名
女性	89	20	209
男性	20	16	97
平均年齢	59歳	57歳	64歳
最年少	21	37	20
最高齢	77	78	91

次に、受講継続の傾向を見よう。表3は平成18年度から平成20年度までの3年間の受講生統計からの継続受講の実態である。この表を見ると6割強の方が3年以上の継続受講をしている。特に、絵画では実に9割の受講生が3年以上のキャリアをもつ。一方、平成20年度新規に応募した受講生は陶芸、絵画教室で2割である。なお、会話教室での新規受講生が35%とあるのは、2つの英会話初級クラス(定員24名)の新設、ならびに、中国語会話新規受講生64%とあるのはやはり2つの初級クラス新設によるものである。このように、講座受講を長年にわたって継続する特徴がうかがえる。参考までに、平成19年度データによれば、2年以上継続受講の割合72%、同年度の新規受講者は28%であった。

表3 受講生講座継続状況

受講継続	陶芸(名)	水彩(名)	油絵(名)
3年以上	41	68%	45
2年	5	8%	15
新規	14	23%	14
計	60	100%	74

受講継続	英会話(名)	中国語会話(名)	計	平均
3年以上	61	56%	13	36%
2年	10	9%	-	-
新規	38	35%	23	64%
計	109	100%	36	100%

以上のように、受講生の平均年齢は64歳、男性よりも女性受講生が多く、3年以上の長期学習を継続する受講生の実像が見えてきた。それでは、受講生がどの市町から通学しているのだろうか。この点は、受講生募集に際し、広報の拠点を模索する上でも役立つ要素である。図5は全受講生の居住地、人数、比率の統計を示したものである。

この図5を見ると、宮代町在住の受講生が最も多く123名(37%)、また、大学から5km圏内の宮代、杉戸、春日部

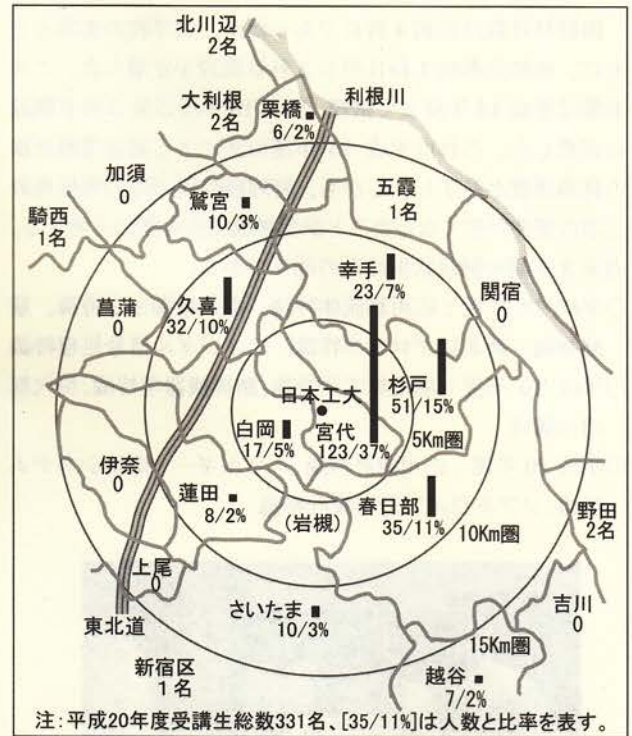


図5 平成20年度受講生居住地分布

の市町居住者は全体の63%、209人である。さらに、大学から10km圏内(受講生の多い順に、宮代、杉戸、春日部、久喜、幸手、白岡、鷺宮、さいたま、蓮田5市4町)に全受講生の93%、309人が居住している。受講生の平均年齢と活動を考えると、もともとの範囲と考えられる。視点を変えると、本学が地域文化圏を構成していると言える。つまり、本学が「自宅の近くで文化と教養を享受できる市民教育施設の役割」を果たしていると言ってよい。

3 免許法認定公開講座

3.1 講座概略

夏季休業期を利用、中学校、高等学校現職教員のために上級の免許状である専修免許を短期に取得する機会を設けている。講座内容は大学院レベル、大学院担当教員による科目指導を実施してきた。この講座は平成7年度より文部省・文部科学省の認可を得ての実施である。平成12年の免許法改正に伴い専修免許取得の際、経験年数による単位数軽減措置が廃止され、在職3年、一律15単位取得と改められ今日に至っている。本学卒業の現職教員は、平成20年3月現在、中学校371名、高等学校820名である。本学の卒業生でこの認定講座を受講、専修免許を取得した方は平成7年度以降平成20年度までの14年間に延べ541名(総受

講師数 2305 名)である。また、この講座は、受講生の理解のもとに本学の学生募集にも一定の役割を果たした。

3.2 開設科目と受講状況

開設科目数は当初 4 科目であったが、大学院の充実とともに、毎年全専攻 1 科目担当 5 科目開設が定着した。この形態は平成 18 年度まで継続、平成 19 年度以降 3 科目開設に変更した。これは平成 15 年度旧法による認定講座受講の経過措置が終了し、しかも、管理職受験の際の専修免許必須の要件が無くなったことが受講数減少の要因と考える。過去 3 年間の開設状況は次の通りである。

- 平成 18 年度：応用熱流体特論、電気制御工学特論、意匠特論、新素材プロセス特論、デジタル信号処理特論
- 平成 19 年度：応用加工学特論、制御機器学特論、現代都市の構成
- 平成 20 年度：応用設計特論、エネルギー・環境システム特論、ソフトウェア分析設計特論



図 6 平成 19 年度認定講座指導風景

図 7 にこれまでの受講者数を示した。前述のように、法改正移行措置終了の平成 15 年度に 205 名(本学卒 25 名)の受講数を記録、この翌年より受講数が激減した。平成 19 年度、本学と同様の工業・技術の免許法認定公開講座実施大学は室蘭工大(平成 21 年度に終了)、足利工大、愛知教

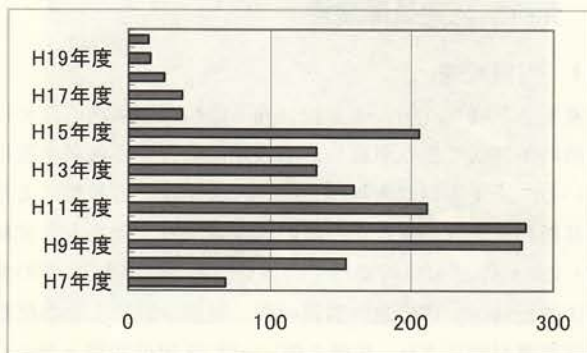


図 7 認定講座受講数の推移(総数 2305, 本学卒業生数 541)

育大の 4 大学、他教科を含めこの種の公開講座は全国 19 大学、県内では本学、文京大、聖徳大の 3 大学である。

4 リカレント教育：シニアチャレンジ講座

4.1 県内 8 大学共同の開放講座

この講座は埼玉県と協定を結ぶ県内 8 大学が共同で実施、55 歳以上の県民対象の開放講座である。本学は、平成 19 年 12 月 25 日上田埼玉県知事と柳澤学長の間で協定書を交換、教授会決定を経て平成 20 年度に事業を開始した。現在の参加大学は本学のほか、埼玉大、淑徳大、城西大、聖学院大、浦和大、埼玉工大、十文字女子大である。講座は各大学がそれぞれ独自に実施、内容は文系、理系両方の領域に及び多彩である。要項は埼玉県広報とホームページおよび大学独自の広報とホームページより入手できる。本学ではこの講座を「シニアチャレンジ講座」と呼ぶこととした。

4.2 平成 20 年度受講状況

春および秋学期開設講座および受講者数を表 4 に示す。春は 3 科目、秋学期は 5 科目を開講した。各科目約 10 名

表 4 シニアチャレンジ講座科目と受講者数

平成20年春学期			平成20年秋学期		
科目名	担当者名	受講者数	科目名	担当者名	受講者数
環境とエネルギー	八木田浩史	13	福祉と情報	片山茂友	4
日本建築史	波多野 純	8	日本住宅の歴史	波多野 純	9
建築計画Ⅲ・集住の形と原理	伊藤庸一	4	風土とすまい	伊藤庸一	6
			環境と工学	佐藤茂夫	2
			総合講義(平成生まれの高齢化社会)	渡辺勝彦	2

受講生募集を行った。春と秋の両方を受講する受講生も見られる。春学期受講生からは、好評の感想が聞かれた。



図 7 「環境と工学」受講風景

5 おわりに

生涯学習センターの運営は主事ほか事務局員 1 名、センター長と運営委員 6 名により実施している。市民と自治体からの大学の地域文化貢献の期待度は高い。この期待に応える事業実施の模索は絶えず継続する所存であるが難問である。学園創立 100 周年記念コンサート「ハーブと室内楽の夕べ」のように胸を張って 300 人の市民を招待できる自主講座の再現と現事業の充実を期待して活動報告を閉じる。